

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



長崎大学医学部キャンパスの原爆犠牲者慰霊碑と海外からの研修生達



『なしむ』第9号

- Report 海外研修生受け入れ
Report 「みんなで考えよう放射線被ばく」
People 神谷さだ子さん
Works 原爆被災学術資料センター
「長崎原子爆弾の医学的影響」

Vol.9
2001 AUTUMN

発行/平成13年9月20日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)
TEL. 095(823)4278 FAX 095(820)3037

海外研修生受け入れ

平成13年度の研修生受け入れ事業が7月16日から8月12日まで実施されました。各々の専門分野やヒバクシャ医療の現場を学びながら、長崎や日本の今を感じる事のできた研修になりました。

研修 スケジュール

研修期間中、研修生の皆さんは講義・実習・専門カリキュラムなどのスケジュールをこなしながら、原子力発電所視察、平和祈念式典にも参列。忙しい毎日でした。

7/16～7/27(一般カリキュラム)

原爆後障害医療研究施設の各教室や原爆病院での講義・実習

7/30～8/12(専門カリキュラム)

免疫学や臨床検査医学などの各々の専門分野での研修

玄海原子力発電所視察

放射線影響研究所オープンハウス参加

NASHIM講演会参加

平和祈念式典参列(長崎市)

恵の丘長崎原爆ホーム訪問

健康管理センター視察



日赤長崎原爆病院での研修中

今年で9回目となる、チェルノブイリ・カザフスタン関連医師等研修が7月16日から8月12日まで、長崎大学医学部を中心に行われました。本年は、ベラルーシ共和国から2名、ロシア連邦、ウクライナ共和国、カザフスタン共和国から各1名の計5名が参加しました。

例年どおり、研修はまずヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための「一般カリキュラム」を行った後に、研修生の専門分野に即した「専門カリキュラム」を行いました。一般カリキュラムでは、関連の各教室で講義や実習を行ったほか、今回初めてとなる佐賀県の玄海原子力発電所の見学を行いました。研修生は全員、日本はもとより、自国の原子力発電所も訪問したことはないということもあって、日本の原子力発電所のしくみや、事故を起こしたチェルノブイリ原子力発電所との違い、あるいは発電所の安全管理や職員の健康管理システムなどについて、熱心に質問されていました。また、廃熱を利用した欧州風の植物園では楽しく記念撮影をする姿もみられました。

専門カリキュラムでは、それぞれの専門分野にあわせて、疫学や臨床検査医学といった長崎大学医学部の各専門分野での研修を行いました。

研修の合間には、母国ではなかなかできない海水浴を楽しんだりする一方、8月9日の長崎原爆記念日には平和公園で行われた祈念式典に参列して、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。

研修生はいずれも今後、ヒバクシャ医療やあるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を背負っていかれる方々ばかりです。このような医師・専門家の方々を長崎に招聘し、研修を行うことで、長崎がこれまで培ってきた被爆者医療のノウハウを世界に伝えるのみならず、長崎発国際医療協力のカウンターパートの育成が可能となります。地理的にも、そして文化的にも遠い国々からの招聘には、いろいろな困難が付きものですが、今後もヒバク地のニーズに即した研修生の人選と研修を進めていきたいと考えています。



恵の丘長崎原爆ホーム施設訪問



秋田などからの研修生と、玄海原子力発電所を見学

今年の研修生はこの5人でした。

ガリーナ・タラソフ
ロシア連邦
オブニンスク州立放射線医学研究所
主任技師

ペロニカ・アンティポア
ベラルーシ共和国
ベラルーシ医科大学国際副部長
医師

イゴール・タラシウク
ベラルーシ共和国
ゴメリ州立医科大学
医科学・免疫学研究室長／医師

ナタリア・グドゼンコ
ウクライナ共和国
キエフ放射線医学研究所／上級研究員

サガダット・サガンディコーワ
カザフスタン共和国
セミパラチンスク診断センター
主任医師



研修を終えた彼等が帰国する前に、印象に残った事や感想をたずねました。

「過去の悲惨な出来事から観光地として復興した長崎の街の美しさ」や日本の文化・伝統に触れた感動とともに、長崎大学や原爆病院、放射線影響研究所などでの研修でみた医療システムやデータベース、遠隔医療システムなどに大変興味を持ち、それが帰国後の各々が携わるヒバクシャ医療にとって大変有意義なものだということ、また今後も長崎とのネットワークをもっと強めて行きたいということでした。彼等がヒバクシャ医療の分野で活躍し、長崎での経験を祖国の人々の治療に役立ててくれる事を願います。



県庁に金子長崎県知事を訪問

パートン G. ベネット 放射線影響研究所 新理事長紹介



チェルノブイリ関連事業を通して、NASHIMにも多大な貢献をなされた長瀧重信放射線影響研究所(放影研)理事長が今年6月に退任されました。後任として7月より前国連原子放射線影響科学委員会(UNSCEAR)事務局長のパートン G. ベネット先生が、原爆傷害調査委員会(ABCC)が1975年に放影研に改組されて以来、米国人としては初めて理事長に就任されました。

ベネット理事長は1939年米国ネブラスカ州に生まれ、現在61歳です。オレゴン州立大学を卒業後、ワシントン州立大学で修士号を、さらにニューヨーク州立大学で博士号を取得され、1964年からは環境測定研究所(ニューヨーク)、1979年からは国連環境プログラム(ロンドン)、さらに1988年からはUNSCEAR事務局長(ウィーン)を勤められた物理学、被曝線量評価の専門家です。

現在放影研では寿命調査、成人健康調査を二つの大きな柱として、被爆者の健康に関する追跡調査が行われていますが、今後は被爆当時20歳未満であった若年被爆者の健康調査に重点を置く予定とのこと。さらに、被爆二世も生活習慣病が発生しやすい時期にさしかかってきたため、被爆二世健康影響調査を今年5月より開始し、被爆者、被爆二世の方々の調査研究を更に進め、疾患の発生メカニズム解明にも今後は努力していきたいとのこと。

新理事長から、「長崎大学、広島大学および地元の調査研究機関との連携、共同研究を積極的に進めて、若手研究者を放影研に受け入れて共同研究を行えるような環境を整え、放影研の魅力を広く世界にアピールしていく必要があると考えています。今後は、今まで以上に長崎大学やNASHIMとの協力関係を密にしていきたいと考えておりますので、更なるご支援を宜しくお願い致します。」とのコメントがありました。

Report

みんなで考えよう 『放射線被ばく』

8月4日、長崎原爆資料館ホールにてNASHIMと長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設の共催による講演会「みんなで考えよう放射線被ばく」を開催し、日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)事務局長の神谷さだ子さんに「チェルノブイリの子供たちに笑顔を」と題して特別講演をしていただきました。

神谷さだ子氏特別講演

日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)は1991年に設立されていますが、92年からその事務局長をされ、献身的な現地活動をされている神谷さだ子氏に、「一粒の子供の涙への大人の責任」、そして女性として、母としてのまなざしを通じて、チェルノブイリ汚染地への医療支援、ならびに文化交流活動の10年間を振り返ってもらいました。

ご講演の隅々にご自身の体験がちりばめられ、まさに原爆被爆者のかたりべに匹敵する迫力と真実味がありました。参加者は一同に感動と深い感銘を受けたようです。たくさんのスライドと思いのこもった、それでいて冷静なお話を50分間たっぷりと聞く事ができました。

JCFでは本年7月までに、58回の訪問団を派遣し、医療専門家による医療知識の伝達と医薬品や医療機器の供与を行っています。特に信州大学医学部との共同事業による、遠隔医療診断技術を用いた小児白血病への末梢幹細胞移植や、化学療法の支援は特筆すべきものがあります。余命いくばくもない子供たちに救いの手をさしのべ、同時に現地の病院への丁寧な支援体制づくりは手作りの味わいを醸し出し、とても暖かいものを感じました。チェルノブイリ周辺に激増した小児甲状腺がんだけでなく、真に支援を必要としている現地の被ばく者たちに何が必要で、何が優先度が高いかを、ご自身39回の現地訪問で熟知されている内容を講演されました。スライドの多くは、基本的に一人一人の患者さんが中心であり、医療の原点を踏襲された国際医療支援活動の真髄でした。

また、日本国内での各種広報活動も紹介されましたが、映画「ナージャの村」の上映展開に努力されています。最近では第2作目の「アレクセイと泉」という映画も近日封切予定とのこと。これからもチェルノブイリをより良く知ってもらい、その上で継続した支援活動の必要性を訴えられ、NGOとしての活動を信州の地から世界へ発信されていられるそうです。信州JCFと長崎NASHIMとの新たな結びつきが胎動を予感させる幅広い、大変有意義なご講演でした。



講演中の神谷さん

チェルノブイリ 原発事故から15年 継続支援必要

世界を震撼させたチェルノブイリ事故(1986年4月26日)は、人類史上最悪の原発事故であり、後世に伝えるべき貴重な教訓をもっています。長崎はこの夏56回目の原爆忌を迎えましたが、被爆後50年以上経っても種々の問題を抱えています。チェルノブイリ周辺の放射能汚染地域には、現在でも400万人近い人が住んでいます。事故から15年、長崎から顔の見える国際協力として、NASHIMはすでに現地からの被ばく医療研修生の受け入れ、専門家の現地派遣指導など毎年チェルノブイリの負の遺産の精算に向けた協力をおこなってきました。その実績は世界的に評価されていますが、情報の収集発信基盤は未だ脆弱です。その為NASHIMが実質的な活動面でお世話になってきたのが、チェルノブイリ笹川プロジェクトでした。しかし、本プロジェクト(10年間約50億円)による現地20万人を越す児童・学童検診支援が本年4月で終了しました。NASHIMの海外ヒバクシャ支援活動も招聘人事などこれにリンクすることが多く、今後は長崎からチェルノブイリへの「継続した国際協力の実行性」が問われています。現地では、今なお自立自活の道は険しく、激増した小児甲状腺がんの発症年齢層が青年から大人に移行し、ますます成人がん検診の必要性が高まり、被ばくしたハイリスクグループの追跡調査が重要となっています。現地の被爆国日本への期待は大きなものがあります。

今後は、チェルノブイリでの活動拠点を絞り、従来の交流成果を生かしながら、被ばく医療に還元できる人材の育成を現地とこの長崎で展開していく必要があります。地域から世界の国際ヒバクシャ医療協力を目指す為には、外交政策などとも協調し、NASHIM自身が他の非政府機関NGOなどとも連携をとり、主導的かつ有効な支援活動へと脱皮していくことも重要です。現地のヒバクシャに対して、身体問題だけではなく、精神的な影響と言う面でも長崎からできることを模索していく必要があります。21世紀、これからがNASHIMの本領発揮の時代に入ります。

日本チェルノブイリ連帯基金

神谷さだ子さん



神谷さだ子さん
長野県出身
日本チェルノブイリ連帯基金事務局長

今回からスタートする『PEOPLE』では、NASHIMやその事業の中で出会ったヒパクシャ医療に携わる人々をクローズアップします。

大地と生きる人々

第1回は『みんなで考えよう放射線被ばく』の講演会に、講師として来て頂いた神谷さだ子さん。日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)事務局長の神谷さんが、そもそも『チェルノブイリ』と関わったきっかけはロシア語。大学でロシア文学を専攻された神谷さんが、そのロシア語が役に立てばとボランティアとして日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)の活動に参加されたのは92年の事。チェルノブイリ事故後の放射線障害に苦しむベラルーシの子供たちを治療する活動に、通訳兼遊び相手として本当に軽い気持ちで参加されたのだそうです。以来9年間、39回もベラルーシを訪れ、多くの子供たちの治療にも力を尽くして来られました。訪問の旅は決してスムーズではなく、ロシアの大平原で車が立ち往生したり、宿ではバスルームのお湯が出なかったりが日常茶飯事。他にも日本からの支援、講演や出版、映画制作と多忙でご苦労の多い活動なのに、『それまでは普通の専業主婦でしたよ』とおっしゃる神谷さんが9年も続けておられる理由をお尋ねすると、『ロシア文学を専攻していたので、ロシア的なものにひかれる』事と、『日本でなら助かる命が、医療環境の整っていないベラルーシでは絶命していく。こんな医療格差があってはならない』という強い思い、そして『過酷な運命にさらされながらも大地とともに生きるロシアの人々のたくましさ』に感動した事を、静かながらも力強い言葉で語って下さいました。

『医療の専門家ではない』とおっしゃる神谷さんですが、その分旧ソ連邦の人々とたくさん友達になり『美味しい家庭料理もマスターした』そうです。

日本と旧ソ連邦との距離に歯がゆい想いをされ、白血病の子供たちの中には治療の甲斐なく幼い命を失った子もいますから、辛いことも決して少なくないはずなのに『人が好きだから続いているのかも』と笑顔でおっしゃる神谷さん。JCFの活動の中で出会ったたくさんの人々が、神谷さんの原動力となっているようです。

『ベラルーシの人々は理不尽な原発事故によってもたらされた厳しい状況の中、本当にたくましく、そしてプライドをもって生きています。日本でモノに恵まれて暮らしている人達の方が、心は疲れているかも知れませんか。』

これから

文化交流事業としてJCFが現在制作中の映画『アレクセイと泉』が11月には完成。坂本龍一さんが音楽を担当されたという映画です。子供たちや若い人にチェルノブイリや放射線と健康についての知識を広める為、全国の幼稚園や小・中・高校での講演やこうした映画の上映も行っておられ、子供たちの素直な反応がとてもうれしいとの事。『自分たちに何ができるのかを若い人たちが考えてくれることが大事』とおっしゃる神谷さん、お忙しい中長崎まで来て頂いて、ありがとうございました。



講演のあと、研修生達との記念写真

原爆被災学術資料センター

『長崎原子爆弾の医学的影響』

長崎大学医学部キャンパスの一角に、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設が数十年にわたって続けてきた原爆被災者の治療と原爆の医学的影響の研究の資料が常設展示されています。

『医学』の立場から原爆の影響を考える事のできる貴重な資料であり、原爆が人の体に具体的にどのような障害を引き起こすのかが、時間の経過や爆心地からの距離等のデータと共に示されています。

熱症や外傷、放射線の強い障害等原爆による初期の死亡、そして一定の時間の後におこる原爆後障害の貴重な研究データは、世界各地で放射線被曝事故の被ばく者治療に役立てられています。

また、長崎大学医学部では多くの医師や学生が原爆の犠牲となりました。自らも被爆しながら命を顧みず人々の救護に当たった医師や学生の記録も『血染めの白衣』と共に展示されています。

こうした医師や学生そしてたくさんの原爆被災者の犠牲があつて、今、長崎はヒバクシャ医療の世界的ネットワークを支える力となっている事を実感させられる展示です。

展示資料は冊子にまとめられていて、無料配布も行われています。

自由に見学できますので、是非一度ご覧ください。

問い合わせ

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設

TEL 095-849-7123

FAX 095-849-7131(資料調査室)

095-849-7130(生体材料保存室)



展示内容

- ◆長崎原爆の物理的被害
- ◆長崎原爆の物理的影響
- ◆長崎原爆の人体に与える影響
 - 急性期
 - 後障害初期
 - 後障害後期
 - 疫学



「なしむ」では、毎号ヒバクシャ医療国際協力に関する様々な事業やニュースを紹介していますが、専門用語も数多く登場します。どなたにも分かりやすく、読みやすい内容にするためよく使われる言葉をこのコーナーで解説します。

1

チェルノブイリ

現ウクライナ共和国の北部に位置する町。1986年4月26日、この町にある原子力発電所の4号炉の事故により、甚大な被害が引き起こされた。

2

ヒバク（被爆／被曝）

本来は、「爆撃を受けること」。その受けた状態によって、「被爆」と「被曝」の二つに分けられるが、国際医療の場では、統一する意味で「ヒバク」と表記している。

3

放射線・放射能

放射性元素から出る α 、 β 、 γ などの線のことを放射線と呼ぶ。放射能とは、その放射線を出す作用のこと。

4

甲状腺

首の部分に存在するホルモン分泌器官。チェルノブイリ原発事故後、小児の間でこの部位のがんが激増した。

5

分からない用語があればご質問下さい。素朴な疑問も大歓迎です。皆さんからの質問にもこのコーナーでお答えしたいと思っています。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

E-mail:fvgt6060@mb.infoweb.nc.jp

FAX:095(820)3037

『なしむディクショナリー』宛お送り下さい。

Letter Box

From Japan

NTT西日本 長崎支店
ビジネスユーザ営業部
システム担当
中川和久さんよりのメッセージ

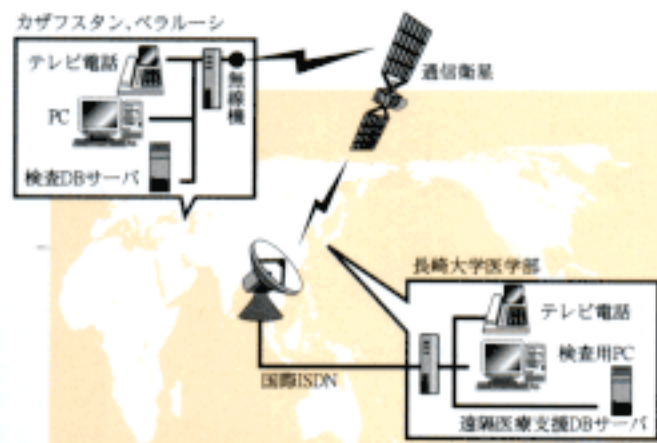


伊王島での海水浴

私はセミパラチンスクの遠隔医療システムの構築や保守をさせて頂いております関係でロシア方面と楽しく関わらせて頂いております。

子供たちと研修生

先日も天気の良い真夏の日曜日にナシムの研修生達と伊王島の海岸に泳ぎに行く機会がありました。その機で子供達が時々興味ありそうに、見るからにガイジンである彼らの周りをうろうろして、声をかけられればさっと逃げ出したりして見ていたいへんほほえましい光景でした。長崎に海外からのお客様はそう多くはありませんが、ナシムの研修生としてせっかく数多くの異国の人が来崎しているのだから、なにか日本の子供達に思い出を残して貰いたいなと、ふと考えました。ホームステイでの家族レベルの交流や学校のイベント参加などで、子供のうちから異国の人と楽しく交流した思い出は子供達の将来の財産に、延いては長崎の財産になっていくものと思います。



中川さんが携わった遠隔医療システム
長崎大学医学部とカザフスタンやペラルーシの医療機関を結んで遠隔医療が可能になりました。

大人になった私自身も海外に行って観光での記憶は少しずつ色褪せていきますが、人と触れ合った記憶はいつまでも残っていると感じております。

ヒューマンな交流

ナシムの研修生は日本で研修したことを現地における被爆者医療の啓蒙啓発活動で活躍が期待されるだけでその目的はじゅうぶん果たされますが、技術・知識の交流にヒューマンな交流が加わるとその効果はさらに上がるのではないのでしょうか。

Have a break....

簡単！ロシア料理 「ロシア風餃子 ペリメニ」

餃子のように、ラビオリのようなロシアの家庭料理にチャレンジしてみましょう。

(材料 約10人分)

皮 小麦粉500グラム 卵(全卵)1個 水1/2カップ(100ml)

具 牛ひき肉300グラム 豚肉ひき300グラム 玉葱1/2個 塩・ブラックペッパー・レッドペッパー適宜
月桂樹の葉2枚 ゆで塩、バター、サワークリーム等

1.まず、皮の準備から。

小麦粉はふるって山をつくるようにし、頂上部分にくぼみをつくり卵をおとす。

水を頂上部分から少しずつ加え、山を崩しながら手で混ぜる。

良くまぜあわせてひとかたまりにし、ラップをかけて室温で30分ねかせる。

2.ねかせている間に、具をつくる。

牛肉と豚肉、みじん切りにした玉葱は、塩・ブラックペッパー・レッドペッパーを加えて手で良くこねる。

味付けはお好みで。

3.ねかせて置いた皮を4つにわけ、その1つを打ち粉をしながら麺棒等を使って1ミリ位の薄さに延ばす。

普通のガラスのコップを使って、皮を丸く型抜きする。

4.型抜きした皮に具をのせる。皮1枚につき具はティースプーン1杯分程度。欲張ってはいれすぎないこと。

まず餃子と同じ要領で具を包み、水を少しつけて皮を閉じる。閉じた皮の両端を合わせて丸くする。

型抜きに使ったコップの大きさにもよるが、でき上がりの大きさは直径2センチくらい。

5.水2リットルに対しティースプーン2杯分の塩を加えてお湯を沸かす。このとき香りづけに月桂樹の葉2枚をお湯にいれる。4のペリメニをお湯の中に入れ、浮いてきてから5分茹でて、すくい上げる。

6.温かいうちに、バターやサワークリームをたっぷりかけていただく。

お好みで茹でたペリメニをバターをひいたフライパンで焼いてもOK。

この分量で100個程作れますが、食べきれないと思ったら茹でる前に冷凍庫へ。ロシアではたくさん作って冷凍しておくことが多いそうです。仲間がそろそろきにわいわいやりながら作ると楽しいかも。



今回「ロシア風餃子 ペリメニ」の作り方を教えていただいたのは長崎大学医学部大学院1年のスタレンキ・ドゥミトリーさん。ウクライナ共和国出身で、何と調理師免許をもっているという本格派。

彼のペリメニは美味しいと好評だそうです。ロシア料理というとボルシチなどが有名ですが、日本ではピーツなどの野菜が手に入りにくいので、材料の揃えやすいペリメニを紹介していただきました。

ありがとうございました。





講演会のアンケートより

8月4日に行った「みんなで考えよう放射線被ばく」の講演会に参加された皆さんのアンケートの中からいくつかのご意見を紹介させていただきます。

「長崎から世界へ どんなつながりをもっていけるのか考えたいと思いました。」
(女性・40代)

「専門的な話しはやはり分かりづらいので質疑の方法を考えてほしい。もっと参加しやすい様に日曜に開催したほうが良いのでは？」
(男性・40代)

「放射能がすごく身近に思える反面、もっと理解していく努力をして平和を語っていきたいと思う。」
(女性・30代)

「もっと市民にPRしてたくさんの人に聞いてほしい講演会だった。」
(男性・60代)

「これまで漠然と耳にしていた事をはじめで資料や実験、体験談に触れる良い機会でした。」
(女性・50代)

「専門家の方々が、市民に解る話しを、と心がけて下さっていて、この試みの大切さを実感できました。」
(男性・60代)

「難しい部分もあったけれど、興味のもてる内容でした。特別講演には胸を打たれました。」
(男性・30代)

ここでご紹介した他にもたくさんのご意見やご感想を寄せていただき、また暑い中たくさんの皆様に参加していただきありがとうございました。
今後もより多くの皆さんに参加していただける講演会となるよう、参考にさせていただきます。

今後のNASHIM事業(予定)

- ◆韓国医師等受け入れ研修(13年11月)
- ◆外務省補助事業実施(ロシア・ベラルーシ) 医師等の派遣(13年12月) 医師等の招へい(14年1月)
- ◆永井隆平和記念・長崎賞の授与(14年2月)
- ◆在外被爆者渡日治療実施(14年3月)

こうしたNASHIMが行う事業については、また次号で詳しく紹介・報告いたします。

Nagasaki
Association
for
Hibakushas'
Medical Care



編集後記

第9号から「なしむ」が新しくなりました。ページ数も増えて、少しカラフルにもなりました。内容も事業報告や紹介だけでなく、楽しんで読んで頂けるコーナーや専門用語の解説などを加えてボリュームアップ。中高校生にも読んでもらえる「なしむ」を目指しています。

特別講演の講師としてお招きし、「PEOPLE」で紹介した神谷さんは長野県の方でした。被爆地・長崎に住む私達ももっと積極的に多くの人達と連携しながら、世界にそして21世紀を生きる子供たちに「ヒバクシャ医療」についての情報発信をしなければと感じさせられました。